



まちでくギャラリー

2014年3月～4月の展示 鵜澤明民・新里陽一

#4



今年も田んぼに水が張られて苗がうえられました。それまで乾いた土の田がむき出しだったものが、陽の光を水に反射して輝き、風を受けて細波がきらきらとラインダンスのようにいきいきと躍動しているのを見ると、こちらの体にまで水分がみなぎって、体の芯まで潤ってきます。水は命の素でこの中に多様な命が溢れるように生まれるのです。

このまちは「土沢商店街」の北側にある丘、館山に当時あつた城を中心に発展した、いわゆる城下町でした。商店街の道は釜石街道として鉄道と平行しており、昭和までは賑わっていました。

このまちに生まれ育った萬鉄五郎を顕彰する萬鉄五郎記念美術館があり、それを商業的に、できれば商業的にもカナメにしようという気分が醸成しているとおもうのは私だけではなく、「アート @ つちざわ」しかし、クラフトマーケットもそうした、まちの思いの延長です。

一時的なイベントではなく、これは通年で作品を観ることができます。歩けば見える景色の一部です。ですがそう簡単に景色になつたと認められるには、まだ道のりが遠いと感じています。

そこで、いわば道に沿つた堀に開いたフシ穴みたいなものと私は捉えています。そのフシ穴を覗けば、見えるのは、意外にも自分自身に呼び掛ける自分を励ますかけ声のこだまなに揺れ動く蜘蛛の巣だつたりします。

まちテク ぶちギャラリー

展示の場所
花巻市東和町土沢商店街



<http://machikado.urdr.weblife.me> でも見ることができます。



たばこの看板のとなりに掛けられた小さな作品の中にも不思議な話がひっそりとですが、たくさん隠れていきました。

いつもの 日常の風景

「街かど美術館」では普段はあまり接点がないような、芸術をまちの中に、ばらまくように置きました。普段の生活の中に芸術を持つてきたりで、何かしら考えずにいられなくなる出来事でした。普段の生活の中でもそういうことを考えることで、日常に句読点をつけることにもなつたのだと思います。

そういう意味では、特別な出来事だったと思います。

この「まちでくギャラリー」は毎日そこに小さな写真がまちのあちこちに、展示されていて、毎日そこにあるということは、見慣れてしまえば、何でもない普段の景色になつているということです。

いつもそこにあるということは、特に見なくても、そこにあるということは知つているよ。ということでもあります。

何か関心があれば見るけれど、なければ見なくてもいいよね。という感じで、簡単にやり過ごせます。それって、実は大変な事、大事な事なんだよ。

いつもそこにあつて、たいていまじめに眺めることもなかつたけれど、実は沢山の意味を持った作品がすぐとなりにあつたんだから。

いつもの、あの小さな作品の写真が少し違う日々のことを語つていたんだ、ということをたまに思い出して観てもらえば、いつか世界の拡がつていることも感じられるのかも知れません。

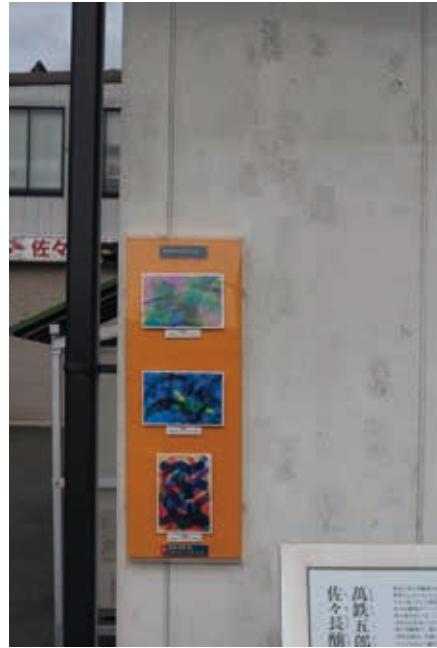
それが、特別な日を作ることになるかも知れないのだから。

しかたがないかも知れないけど…

菅沼 茜



⑩ 平沢宅 鶴澤明民



⑥ 佐々長醸造 鶴澤明民

昔の映画で、あれはなんだったでしようか「世界残酷物語」で見たんで
しょうか、アメリカのある村では、そこへは馬車で行かなければならぬ
地区があるという話でした。間違つてそこへ車で入ると、銃で撃たれて
しまうくらい、保守。「的」などと付けていられないくらいに、旧態を守
るキリスト教徒の村があるんだそうだ。そういうこともそこでは紹介され
ていました。

もちろん電気も使えない、古い生活様式を守り、新しいものには、なに
もいいものはない、という教えをかたくなに守つているというような話し
ました。そりやそりや。新しいと言うことは生活を変えることでもあるし、
未知のものを受け入れるには冒険もしなければならないはずです。冒険は
危険で破滅にも繋がりかねないというおそれも当然です。
そのくせに鉄砲はいいのか?とその時に疑問に思つたけど、アメリカで
は自然なのかも知れません。

古いしきたりに沿つて生きて、前例にないことはしなければ、判断に苦
しむこともない。

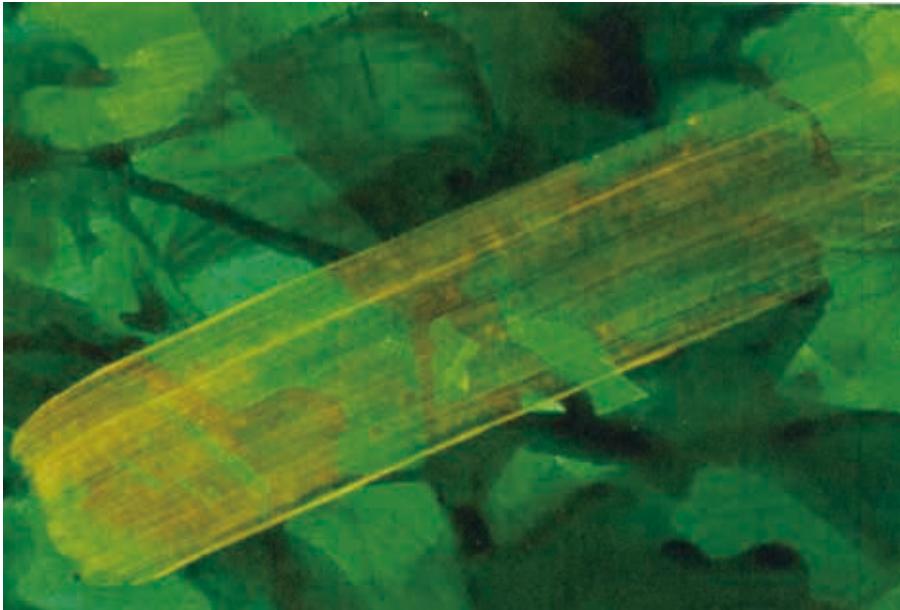
新しい判断を求められる出来事つてないのかなど、その時に思わされ、

以来その話しあはづつと、私には引っかかり続けている問題のひとつでした。

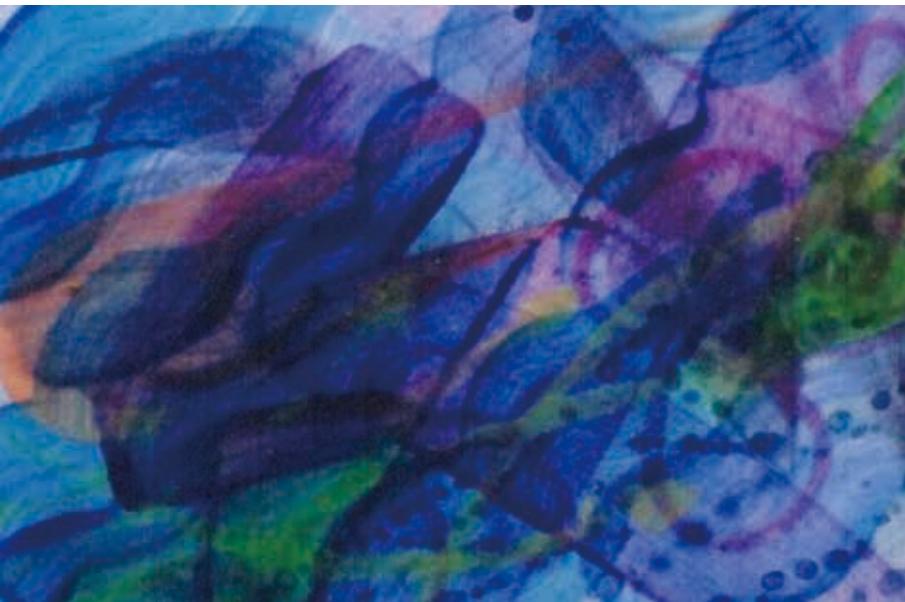
鶴澤さんは、はたち頃からの仲間として、一緒に活動をしていたあい
だ柄です。家族と一緒にいるよりも多く時間を過ごした時期もあると思うく
らい、よく一緒にいました。一緒にいて多くの話をしました。彼もまた吉
本隆明の本を読み深く共鳴をする若者のひとりでしたが、私はもっぱら鶴
澤さんからその話を聞く専門で一度も読んだことはありませんでした。
そうした話しの中で、今でもよく覚えている彼の言葉は「緑さんもイメー
ジの問題を考えるべきだ」というひとと言です。当時からも、今でもそうな
のですが、私は実感しなければ理解できないタイプで、その言葉にそうな
んだろうと感じはしても、今同様「イメージ」ということの意味がよく理
解できませんでした。

今回この「マチテクギャラリー」の事に協力をお願いして、鶴澤さんと
も何度か手紙や電話を繰り返し、彼の文章を読み返すと若い頃のことがよ
みがえるような気がしましたが、鶴澤さんは物事に対するスタンスがなに
も変わつてないという事でした。「共同幻想」という社会がつくり出
す認識の方法をまず解体して、その構造を知った上で「イメージ」を組み
立てろ。ということだと思います。それは当然すぎるくらい自然な話で、
「幻想」の意味をきちんと知った上でなければ、自らの、より自由な「想像」
はあり得ないということだと思います。

想像の自由ということもまた幻想でしかないのでしょうか、私たちが生



生成 (22) 1995 ボードにアクリル 21x30cm



生成 1993 ボードにアクリル 10x15cm



生成=光=影 2013 アクリル板にアクリル絵の具

きているこの今という時間と、世界という空間をイメージして実感を深めながら生きてゆくしか方法はないのでしょうか。

どんな生き方をしようが、あるいは死に方をしたとしても一生は一生だし、一生を秤にかけて比べることも意味がありません。でも、この意味と「う言葉がくせ者で、この言葉の意味に私たちは振り回され、そのためには無理矢理へりくつをこね回し、訳も分からぬうちに幕を落とされて現世に見切りをつけられてしまうのでしょうか。

と、まあなんとも厭世的な言い回しで申し訳ありませんが、その上で人生を楽しむ事ができれば喜びもまたひとしおということでしょう。

しかし、鵜澤さんの場合、いや私もそうなのですけど、ひとりで生きていると思つても決してそうではなく社会という流れの中で翻弄されつつ生きて行くしかない小さな個人がただ流されるだけではなく、社会の構造を少しでも知ろうとする。そして、その違和感を質すためにも自らの意見を明確にしておかなければ、不満は拡大するばかりだという基本的な位置があると思います。

現実という大いなる虚構を感じた上で、展開する美術に多様な感覚があるということを認識した上で、鵜澤さんの美術に対する基本的な考えには「何が絵画を絵画たらしめているのかを探求すること」いう言葉が出てきます。

絵画には絵画に固有な特性があつて、どんなに絵画の要素を分解しても美術には魅力が尽きないという、その魅力がエネルギーになつているのだと思います。

と鵜澤さんは彼の文章の中で語っています。

それが、芸術の大きな目的でもあり、原点でもあるのだろうと、今回つくづく思います。

古きを護ることも、ひとつ的方法かも知れませんが、未知のものに惹かれて、そこをつついてみたくなる好奇心が人間をここまでゆがんだ猿にしてきたのだろうと思いますが、どんなにゆがもうが、一度走り始めた好奇心は留めることができない、という決定的な欠陥的特性を含んでいるのだろう。

節度を知らない猿のつくり出した社会が残酷物語であり、かけがえのないこの地球をも、ゆがんだ空間におとしめて自分の立つ場所がなくなつても戻ることができないのかも知れません。

これも古い映画の「気狂いピエロ」のラストシーンで頭に巻き付けたダイナマイトの導火線に火をつけてから、慌ててその火をもみ消そうとするジャン・ポール・ベルモンドが演じるフェルディナン。ドーンと爆発して硝煙が海岸に立ちのぼり、画面にはアルチュール・ランボーの詩が書かれて終わります。

「もう一度見つけた なにを? 永遠は太陽と番つた海だ」といつても、もうしかたがないのです。

でも、しかたがないという言葉ほどしかたがないものはないような気もします。



生成=光=影 2013 アクリル板にアクリル絵の具



生成=光=影 2013 アクリル板にアクリル絵の具

実は私は、この「美術」ということについて、まだまだよく分からぬいことだらけで、かなりどんちゃんかんな話ををしてしまっているのかも知れません。にもかかわらず、知ったかぶりをして、今までの経験値を宛てにして、かなり感覚的に、結果としてはそういうこと（実感したということ）になつてしまつていると思います。

そして、鶴澤さんがいうように「イメージの問題を考えた方がいい」ということを振り返つてみると、私たち人間の生活はこの「イメージ」によってそのほとんどの部分が成り立つてているのではないでしょか。考えるということ自体が、イメージする事として基本になつていてると思います。昨日のことを思い出すことも、来週の予定を調整したり、商売をすることもすべてがこの「イメージ」の能力によつて処理されています。英語では想像することから、目に見えている画像までイメージです。創造という言葉は作るといふことを表して、英語ではクリエーションですが、これは「天地創造」から始まつてゐるそうです。

つまり世界を作ることは、人と物の関係のあいだに、イメージが大きく横たわつていて、イメージという・ク・ツ・シ・ヨンがなければものを考えるといふことの多様性は生まれなかつたのではないでしょか。

世界を想像する時に、剩りにも大きく括るイメージに区切りをつけるために、神を持ち出したり、その神のなせる技であれば「しかたがない」事で済ませることもできたのでしょうか、神もイメージであるならばそつもいつていられない厳しさに直面しているのでしょう。

イメージの生まれ方

菅沼 緑



毎日何かしらのスケッチをここに描きとめていて、それが何冊かで
きているということでした。

「葉子ストーリー」というタイトルのついた小さなスケッチブックは
鉛筆やカラーペンで彩色されていますが、鉛筆を押しつける手の圧力
が執拗なまでに高められ、塗り重ねられて黒鉛の層が光るくらいに、
塗り固められています。このことは非常に意味があると思いました。

その執拗さとは裏腹に、非常に淡泊に描かれているページも人々に
見えます。毎日描きためるということは、非常に困難なことで、義務
化された楽しみは、すでに強制なので、愉悦などとは対極の存在です。
おそらく鉛筆を持つてページを開いたものの、なんの用意もされて
いない、白いページほど重いものはないはずです。そういうときは、
とにかく手を動かして、なにがしかの痕跡だけでも残そうとして、意
味不明な描画に走るのです。むしろそういう時の方が、素というもの
が持っている力が發揮されると思います。その苦しさがもう見える
ようなドローイングも随所にあつたように思いますが、その他ペー
ジの作品も新里さんが昔からテーマとして続けていた形がここでも
様々に姿を変えて顔を出していると思いました。

14ページの「葉子の3人の男友達」というドローイングもひとつの
核になる形から増殖するよう増え続ける形の現れ方を踏まえている
ように思います。つまり、イメージ、と簡単に人が想像するさまざま
な形式のことをざつくばらんに呼びますけど、イメージというものは
それほどストレートに生まれてくるものでもなくて、何かひとつパ
ターンというか、ひな形のようなものが必要なこともあるのだな、と

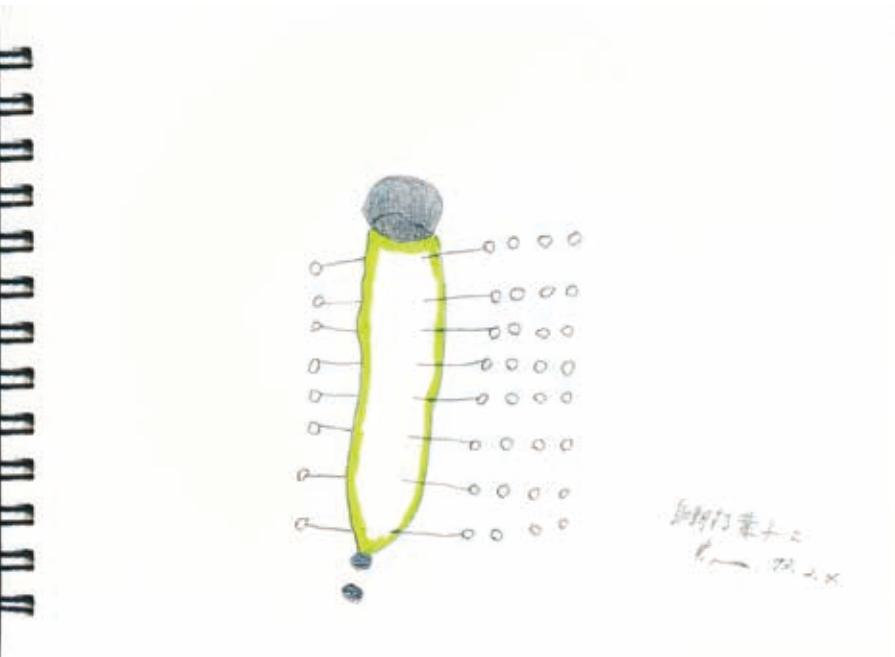
この回に鵜澤さんと一緒に展示をさせてもらったのは、新里陽一さん
です。鵜澤さんと対極的な存在として考えてみたいと思ったからです。
彼もやはり、学生時代からの仲間です。

青春の時間を共有しながら時代の波にもまれて、荒波を泳ぎ切って
みたり、溺れて沈んでみたことも、多少の違いはあるものの、同じよ
うなステージである時はライトに照らされ、はみ出したり振り回され
たりしながらも40年以上これにしがみつき、そこで存在をし続けたの
です。

ある意味それは共に戦う仲間でもあり、見えない敵を相手に格闘を
続けるしかない孤独な作業者でもあるわけです。

「マチでくギラリ」に写真の提供を新里さんにお願いをした時、
彼が私に見せてくれたのが、ここに出した、ハガキ大のスケッチブッ
クでした。

ここ何年か続けているという日記帳です。



思いました。

全く、ゼロのところに唐突になにかのイメージが湧いてるのでなく、何かしらのテーマがあつたり、契機となる想像が引用をするよう、新しいイメージを生み出すのが、人の想像を生む条件なのではないのだろうかと思つたわけです。

新里さんは「いつも想像力をもってますが、こぐん益いさせて、しかもテニガ儀して、想像の闇の重しあうにか押し上らるるとの下からイメージという光が、まるで天岩戸のごとく漏れてくるのではないでしようか。

新規事業の開拓に意を用ひ、一方で、同社は、同時多発的に溢れるイメージがグラスからこぼれ落ちて、テーブルに拡がります。

私などはグラスからこぼれでのを見た時点で、收拾がつかなくなつてしまい、それ以後の言葉がすべて理解不能になつてしまします。

それも私の想像力が作るパターンがおそらく適合不能を引き起こしてしまうのでしょうか。

それほどもがく
新里さんのイーライの拿がた。広がりには、いくら自由であつても、やはり、人の持つ想像力のパターンからは自由ではないはずなのです。

想像力や想像するということは、人がコミュニケーションをする上でのもともと画期的な能力として猿と決別する進化の最大の成果だつ

たのでして、脳の構造や脳育については何も知りませんが、想像力は脳の能力だけではなく、「心」的な力でもあると思いますが、それはおそらく脳の機能だけではなく、「心」という存在、心は脳の一部なのかも知れませんが、少なくとも、頭で考えるだけではなく、気持ちだと、感情の領域は前頭葉だけではないと思うのです。

そうした不可思議な能力を得た私たちには、ものごとのありようを人と共有するために、想像という力を得て、しかも心という場所でだとと思うのですが、人それぞれが子どもの頃から育て続けた想像のパターンの中で、想像のテコを「イメージ」という最強の道具を働かせながら、歴史を作ってきたのだと思うのです。

そうやつて作り上げた想像を「幻想」と「現実」に分けていますが、この仕分けがじつに曖昧でどこにその境目があるのか、私にはさっぱり分からぬよ。二、二へ(免許、会員)二、二へ(東洋二十三)

ひとりの人の想像力が、作り上げた「イメージ」を共有して、そこ
に現れるある種の感情が幻想なのか、「実感」なのか。
が。
り分かりません。たいたいの境界は
経験則で何となく線を引きます

「実感」とはなんなのだろう。新里さんが溢れるように連発するイメージの嵐も、もちろん彼自身の意思や感覚に基づいているのだけど、実

は想像というのははあるパターンの中でやつてている、心的現象なんだろうな。そんなことを言うと身も蓋もないけれど、新里さんの「溢れる「イメージ」」に対して、それほど怖れを持たなくともいいかなという気になつてきます。

しづくいし奇譚

—切り抜き帳より

藤崎しげる



東和町の、先輩である S'r 氏からの依頼を受けて、まちテクふちギャラリー（仮称）のスタッフとして参加することになりました。

話は今年（14年）の1月28日火曜日の事柄から始めることにします。

昨日青空、今日は雪、明日の天気は分からぬ。

幼い少女は土手に積もった雪を前にして立ち尽くし1本の枯れた小枝を持っていた。僕にはその枯れた小枝が可憐に咲いている花に見えたのだ。僕は「ここにちは」と幼い少女に声をかけていた。あまりにも可愛らしく、無垢な姿に映つたのかも知れない。幼い少女は振り向きにつこり笑いながら「ここにちは？」と答えてくれた。雪は、先程よりも多くなってきたのがする。幼い少女は、再び土手の方に向き直り枯れた小枝に話しかけるようにじつと見つめ始めた。買い物に出て来ていた僕は急ぐことにした。歩きながら幼い少女の方を見返ると、まだ枯れた小枝を、いや可憐な花を持ち立つていてる様にも見える。その柔らかな笑顔が、僕の記憶の印画紙にくっきりと焼き付けられた。

雪の降らない土地の人に、雪景色を語ることはタブーなことだろうか。雨の降らない土地の人に、雨景色を語ることは夢みたいな事だろうか。などと考えながら二日酔いの重い足取りで毎日のように買いに来るスーパーにどうにか辿り着いた。

寒気がする。もやし、鰯の開き、漬け物、昆布の佃煮、野菜のかき揚げ、3切れの食パン、飲むヨーグルト、そして500ミリリットルの缶ビール4本を籠の中に入れレジで料金を支払う。午後1時過ぎである。外出すると、雪は止んでいた。幼い少女は、やはり土手のところにはいなかつた。僕は枯れた小枝、いや可憐な花を探してみたのだがどこにも見当たらなかつた。持つて帰つたのだろうかと僕は首を傾げ自分の足下を注意深く見た。小さな2つの足跡が可愛らしく残つているのだ。太陽が、雲間から少しだけ顔を出し辺りを俄に明るくした。なぜか僕の気持ちは暖かい趣になつていた。

飛ぶためには、意識がいる。落ちるためには、心がいる。都会から遠く距離を持つことに郷愁という言葉が僕を主人公にしてくれる。やることも、怠けることもすべて自由である。そして時間が経過して1日が終わる。明日が来なくても明日のことが分かる。くり返される日々、急変する天気のように僕の気持ちに寂しさがこみ上げていた。太陽は雲に隠れ、雪がまた降つてきた。

雪の降る土地の人に、雪景色を語るとセンチメンタルになるという。雨の降る土地の人に、雨景色を語るとロマンになるという。

そろそろ本題に入らねばいけない。

千葉に住むNt氏はどうしているだろう。元気で精力的に活躍していることは間違いないはずだ。僕はNt氏の作品が好きである。自らの実家の田んぼの土を利用したり真鍮板などを使用したインスタレーションの表現をしている。僕が関東にいた頃は、Nt氏の作品をよく鑑賞したり、何度か一緒に発表したこともあった。Nt氏からは、なにかのイベントがあればいつも僕に必ず知らせててくれる。なかなかその現場に行けないのが残念でならない。今、僕は活動する環境を変えようとしているところだ。今年の秋頃までに目処が立てばと思っている。Nt氏には、改装を終えた新しい環境の場では非ともやつてもらいたいと予定を立てている。しかもオープンなら最高である。連絡をしなければいけない。

京都に住むSy氏はどうしているだろう。Sy氏とは、僕の大学時代からの知り合いです。神奈川県の出身だと記憶しています。結婚の関係で、京都に移つたのだと思います。毎年僕に賀状を送つてくださり、賀状を出さない僕は発表する案内状とか刊行した冊子等を送つてきました。そのような結びつきは、40年近くになろうとしています。その期間2人は一度も合つたことはなく、電話の声で数回だけお互いの存在を納得していました。Sy氏の活動は、国際的である。版画、

写真などの発表を通してながら教育のことにも積極的であると思います。インドネシア方面にもアトリエを構えているらしい。合いたいと思います。是非とも岩手に来ていただき、新しい環境で発表していただければ幸いです。恥ずかしがり屋の僕に勇気を与えてくれると思います。連絡いたします。

この2人の男性のそれぞれの生き方、人生は、僕にとりども大切な約束もなく駆け引きもない信じられる事実なのです。いずれ、東和町のまちテクの現場に、この2人の人生の一部を見せられることになるでしょう。毎回、このコーナーでは僕は僕の人生の良しとする人たちを紹介していくつもりです。

僕は小降りの雪の中を午後2時近くに家に着いた。昼食、いや今日1回目の食事だから僕には朝食と言つた方が良いだろう。枯れた小枝、いや可憐な花を持っていた幼い少女の姿が浮かんできた。よほど機嫌が良くなつたのだろう、僕は暖房のきいた居間の座布団に座り、"東京セレナーデ"の曲を口ずさみながらテーブルの上に置いた飲みを確認しつつ、こよなく愛飲している缶ビールの蓋をプショと開けたところ…。 つづく（5月6日）



N2 スタジオライブ 28 『SHIZUKUISHI 会議』「文具採集-記憶（自ら）のコレクター
2012年8月20日（月）～9月5日（水）
新里さんは「イエロープラントギャラリー」を自宅を開設しています。全くの等身大
であり、素のままの彼の生き方と完全に一致しています。

「マチでくギャラリー」 #4
2014年3月4月の展示
鶴澤明民・新里陽一
花巻市東和町土沢商店街 22 カ所
発行 東和町土沢商店会連絡会 2014年5月30日

企画・編集 toncacci atelier
花巻市東和町田瀬 14-120
代表 菅沼緑
roqu@me.com
<http://www.arttsuchizawa.com/>
<http://machikado.urdr.weblife.me/>

